展勝地風土記
Vol.22
平成29年10月27日
展勝地開園100周年記念事業準備委員会
問い合わせ／北上市都市整備部都市計画課☎72－8279

展勝地開園100周年記念事業準備委員会で、100周年に向けた取り組みとして、より多くの市民に展勝地を知っていただくため、展勝地に関するさまざまな情報を紹介しています。歴史的なこと、地理的なこと、自然環境のこと、そして、展勝地に深く関わった人々や展勝地を題材にした美術・文芸作品などについて紹介していきます。次回は平成30年1月26日に発行します。

「展勝地と父と私達と」

八重樫　沖　子

筆者プロフィル
八重樫　沖子(やえがしおきこ)
澤藤幸治の長女として大正15年に生まれる。

父・沢幸※が亡くなって60年になろうとしている。昔の記憶が薄れていく中で、幼い頃の他愛のないことが思い出される。

昭和8年、新しく珊瑚橋が出来た時、私は小学2年生だったと思う。父たちの展勝会が桜並木に売店を出した。花見に来た人たちに楽しんでもらおうとのことで、団子や絵はがきなどを売っていたようだ。そして、ゆで玉子を売ることになったらしい。母が作ったゆで玉子を3個ずつ網袋に入れたものを売店に届けることになった。私は1人で珊瑚橋を渡り、コンクリートの階段を降りると、売店に置かれた大きな蓄音機から歌が流れてきた。私は店員さんに玉子を渡すと安心して、今来た道を引き返すのだった。私にとって「はじめてのおつかい」だったかなと懐かしく思い出す。玉子運びは一シーズンだけだった。事情は分からないが、家の物置に「展勝地みやげ」としるされた木皿や赤い網袋などが積まれていたことを覚えている。

昭和18年ごろ、戦争中のことだった。軍部の命令で、展勝地の桜を伐(き)り、幹は木炭の原料にするということになったらしい。初めに式らしいことを行い、いよいよ木を伐ることになった。1番目は父である。寒さの残る3月のことで、父は外套(とう)を着ていた。ボタンを掛けていなかったので外套が風で捲れ上がったが、父は一振り斧を入れた。その後ろ姿が今でも目に焼き付いている。あの頃は金物を供出して戦争に協力することになっていた。珊瑚橋の欄干も供出で木製になっていたが、「桜は金物とは違う。生き物ではないか」と女学生だった私には納得いかなかった。その後、父は「1本おきに木を

現在の児童公園トイレ付近にあった、珊瑚橋から桜並木に降りるコンクリート製の階段

※沢幸(澤藤幸治)　展勝地育ての親。大正９年和賀展勝会を結成し、翌年展勝地を開園させた。昭和９年から旧黒沢尻町長を２期、12年から終戦まで県議会議員を務める。35年没。43年に市民の手でみちのく民俗村入口に銅像が建てられた。

開園当初の桜並木に立つ澤藤幸治(中央)

伐ることは、桜の成長のために良いことだ」と言って、明るい顔をしていた。父は本当にそう思っていたのだろうか。今でも斧を振り上げる父の後姿を思い出し、「あれは父の本音だったのか」と問いかけている。

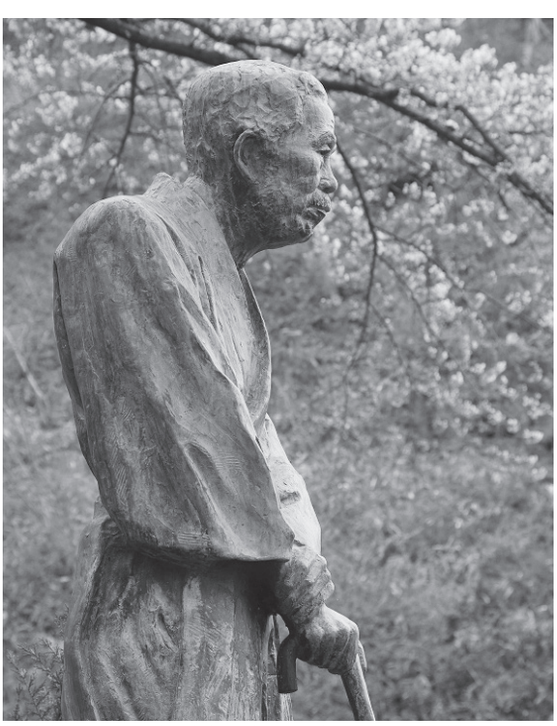
終戦直後の頃であったかと思う。「沢幸老いたり　花はこれからだ!!」と書いたビラ風の紙と印刷物(共存共栄などの雑誌)をリヤカーに積み、手ぬぐいで鉢巻をし、チョッキ姿の父がそれを引いていく。その後をついて弟と2人歩かせられたことがあった。1杯飲んでのことだったろうか。父は誰彼かまわず道行く人に演説をしながらビラと冊子を配って歩くのであった。川岸の我が家を出て、立花方面へと珊瑚橋を渡った記憶がある。父について歩くことが、子供心にただただ恥ずかしく、その時の父の心の内や訴えていることなどについて考える余裕もなかった。

今改めて思いおこしてみると、あの時の父の展勝地に掛ける並々ならぬ執念が、リヤカーを引く父の後姿と共に、切なくも懐かしくよみがえってくる。

父は73才になった。朝の駆け足は散歩に変わった。私は中学生になった。友達は展勝地(?)だった。1月には「1回目の花見」が始まる。それからは足繁く展勝地に通い、「花見の本番」を迎える。「本番」になると、父の散歩は桜のチェックを兼ね、2時間以上になることもあった。日中は家の中から花見客が歩いて行くのを観察(?)するのが日課であった。我が家では花を見ることよりも「花見客を見る」ことが優先していた。めずらしく父が「皆で花見だ」と号令をかけた。喜んで付いていくと、桜の幹の芽掻(か)きをしながら並木道を往復しただけの「花見」であった。

昭和35年の春、父は床に臥していたが背中に布団を当てて座り、ガラス越しに花見客を眺め満足気であった。そして6月、父はこの世を去った。

私は父の晩年と同じぐらいの年齢になった。今でも、毎日展勝地に通っている。


博物館入り口に桜並木を向いて建てられた澤藤幸治翁像